

(魚類：ヤツメウナギ科)

■ スナヤツメ

Lethenteron reissneri

(平成19年9月7日指定)

徳島県における指定状況：絶滅危惧Ⅰ類

環境省における指定状況：絶滅危惧Ⅱ類

その他の指定

愛媛県 RDB 絶滅危惧ⅠA類

松山市 RDB 絶滅危惧Ⅰ類

松山市 天然記念物

高知県 RDB 絶滅危惧ⅠA類

3) 分布

宮崎県を除く九州以北、国外では沿海州、中国北部、朝鮮半島に分布する。

生育地と生育状況

園瀬川(徳島市)：下流域において数個体が確認されている。

神田瀬川(小松島市)：最近では1996年に1個体が確認されたのみで、その後の調査では未確認である。

那賀川水系(阿南市)：最近、那賀川本川の下流域で1個体が確認されているほか、中流域の支川でも複数個体が確認されている。

海部川水系(海陽町)：水系内の3カ所で確認されており、それらのうち1カ所は徳島県内ではもっともまとまった個体数が安定的に生息している。

種の概略

1) 特徴

本種はヤツメウナギ科に属す純淡水魚である。体は細長く、2基の背鰭、菱形の尾鰭がある。臀鰭と胸鰭はない。口は円盤状で、顎がない。小さな眼の後ろに鰓孔が7つある。幼生期(アンモシーテス)には口はロート状で、眼は無い。

なお、本種には形態的に区別できないが、遺伝的に隔離された2集団—北日本に分布する北方集団と南日本に分布する南方集団とがある。両者は実質的に別種であり、暫定的にスナヤツメ北方種、スナヤツメ南方種とも呼ばれる。徳島県産スナヤツメはスナヤツメ南方種である。

2) 生育環境

水質の良い河川の上流域下部から下流域にかけの軟泥質の淵と礫底の瀬が隣接した場所に生息する。数年間にわたる幼生期には軟泥質の泥中におり、有機物や微細藻類を食べている。変態して成体になると繁殖のために礫底の瀬に移動するが、餌は採らない。

絶滅要因

1) 生育地の消失・分断

かつては四国4県に広く分布していたことが判明しているが、現在では徳島県と高知県内の吉野川上流支川のみ分布している。徳島県内の生息地は散在しており、分断化されている。ただし、この分断化は地史的なものと近年の人為的な生息地の消失によるものとが混在していると考えられるので(水系間では遺伝的な分化が生じている可能性が高い)、水系間の分断よりも水系内における分断を考慮すべきである。

海部川水系を除き、どの水系においても生息地点・個体数ともに限られており、個体群の存続基盤は脆弱である。ただし、本種の確認は他の魚種に比べて難しいため、今後、数カ所の小規模な生息地が発見される可能性がある。



スナヤツメ

2) 生息地の質的劣化（水質環境）

現在残されている生息地を見る限りでは、湧水または伏流水が湧き出ているような場所に限定されている。このことから見て、水質汚濁に弱いと考えられる。

3) 生息地の質的劣化（構造環境）

幼生期には、流れのほとんどない軟泥の中で生活し、成体は隣接する流れの速い礫底の瀬に移動する。本種の生息には、これら2つの異なった環境が隣接して分布することが重要である。すなわち流程レベルで空間構造の多様性（水際線の複雑さが一つの指標となる）が維持された場所でなければ生息できない。このような空間構造の多様性は、河川改修によって容易に失われるので、十分注意が必要である。

4) 過剰な捕獲

かつては一部で食用にされたこともあるようだが、一般に漁業的な捕獲はない。ペットとしての捕獲については不明だが、影響は軽微と思われる。

5) 外来種による圧迫

特定外来生物のオオクチバスやブルーギルとは生息環境が異なっていることから、影響はほとんどないと考えられる。

保全対策

1) 多様性の高い水際線の保全・創出

前述したように、空間構造の多様性の消失が、水系内における生息地の分断化に容易に結びつくと考えられる。とくに重要なのが、瀬の近傍における軟泥が堆積するような小規模スポットの確保である。水際線が複雑に屈曲するような場所にはワンドが多数生じ、軟泥が堆積するような場所も生じやすい。このような場所があれば、まず本種の生息の可能性があることを想定し、生息調査を実施すると共に、保全する必要がある。

また、このようなワンドは数平方メートル程度の小規

模なものであることも多いので、地形を注意深く観察しないとわからない。また、瀬と軟泥質のワンドとがセットになった地形要素の多くは失われているので、今後は積極的にこれを創出していくことが重要である。ポイントは、水際線を直線化しないこと、河床を平坦化しないこと、水制などを設置して水際線を多様化し、軟泥の堆積場を確保することである。

2) 水質環境の改善

湧水・伏流水の湧き出しを保全・創出することが重要である。例えば、海部川支川では、流路の付け替えに伴い旧河道における流量が減少し、水質も悪化し、ほとんど生息しない状態となったが、後に伏流水を導水する工法を採用したため流量が増え、水質も改善され、生息個体数が劇的に増加した。その後の生息状況は、安定的に推移している。

幼生は軟泥中に生息するが、軟泥が堆積しさえすれば生息するわけでなく、嫌気化していない状態が維持されていること必要である。そのためには、泥中の間隙水が交換される必要があり、そのために湧水が役立っていると考えられる。

3) 捕獲の監視

現状では、捕獲の影響は大きいとは考えられないが、個体数が少なく脆弱な個体群もあるので、巡視員等による監視は必要である。

4) 放流行為に対する啓発

今のところスナヤツメが放流されたという記録はない。しかし、魚類に限らず、減少したのなら放流すればよいという風潮が依然としてあり、他水系の個体を安易に放流され、遺伝的攪乱などを引き起こす危険がある。学校における環境教育など、あらゆる機会を通じて県民に注意を喚起しておく必要がある。

（佐藤陽一）